ロータリー理念研究委員会発表・11号

ガバナー月信第11号と第12号は、櫻木英一郎ガバナーと５名の委員が忌憚のない座談会を開催した報告文の発表としました。

ロータリー理念研究委員会　海寶　勘一
（千葉西RC）

◇平山　勝巳（千葉若潮RC）

私は職業奉仕とはシェルドンの唱えた第二標語そのもののような気がします。この標語はロータリーソング＜R.O.T.A.R.Y＞の歌詞の中にもあり、多くの会員に知られております。もしこの第二標語がなく第一標語のみであったらロータリーは道徳的色彩が強くなり今のような発展はなかったのではないかと考えております。また職業奉仕を語るうえでハーバート・テーラーの＜四つのテスト＞も重要です。この標語は今でも多くの会員に愛されております。1915国際大会で議決された＜職業倫理訓＞は1980年の規定審議会で削除されましたがその考え方は今でも継承されていると思っております。直木太一郎初め理論家といわれる多くの人達がその著書においてロータリーにおける職業奉仕の重要性について力説しております。地区の指導者の中にもロータリーにおける職業奉仕こそ真の奉仕活動と考えておられる方がたくさんおられます。このような現状を見るとロータリークラブの本質は今でも職業奉仕的実践活動ということが言えるのではないかと私は考えております。この個人奉仕の考え方は他の奉仕団体にはないロータリー独特の考え方です。社会奉仕につきまして私は、援助を必要とする身近な人たちをクラブ（団体）として支援するということだと思います。それは人間として当然のことであります。社会奉仕には二つの側面があると私は考えております。一つは社会奉仕を行うことはクラブの使命であり目的であるということです。もう一つの側面は社会奉仕活動をクラブで行うことにより、会員同士の連帯感、会員の満足感、会員間に友情が芽生えてくるということであります。そのことがクラブを活性化し組織を維持し組織を発展させる原動力になるということです。すなわちクラブを維持し発展させるための手段として社会奉仕活動は必要なのであります。職業奉仕と社会奉仕が車の両輪になって回転していかないとクラブの発展は望めなと思います。

◇大内　啓（柏南RC）

月信への寄稿に当たり、ロータリーの理念に付いてはさまざまな考えをお持ちの方々がいらっしゃいますので、私的な意見を挟むことで、排他や不寛容な文章になってはならないと思っています。先達の歴史的文章を紹介することに留めようと思いつつも、大した知識もないまま自身の人生観的な思いを書き加えてみました。我々は職業人の集まりであるから、会員各々が日々の事業の中に職業奉仕の理念を取り入れ実践し、その結果、社会に大きな信頼と善行の影響を与えられることを体験してきました。例えば商取引を例にとれば、売り手と買い手の双方に利益と満足を与える関係性が保たれなければ商売の発展はありえない。買い手は商品と満足を手に入れ、売り手は代金と買い手からの感謝を受け取れるという売り手と買い手の間に相互信用を築くことが必要であり、常に商取引には高い倫理観が求められています。突き詰めれば職業奉仕の精神「相手の立場に立って相手に思いを寄せる心」が不可欠となり、これをロータリーの奉仕概念としたロータリアンが、それぞれの事業に於いて愚直に実践することにより社会に大きな貢献をしてきたからだと思う。しかし、グローバル化の弊害として急速な経済の発展に人のモラルが追い付かず、社会全体で行動規範の劣化が進んでいるように思われる。現代社会においては、ますますロータリーの職業奉仕が貴重で不易な理念と思えてくる。ところが職業奉仕の理念を絶対不易と信じているのは日本のロータリアンくらいらしい。世界的な風潮は職業奉仕の理念「相手の立場に立って相手に思いを寄せる心」はお題目と捉えて、それぞれの事業や地域社会で、また国際社会に於いては、様々な活動を実践させることが国際ロータリーの基本的なスタンスらしい。この発想は実に明快ではあるが何か釈然としない。それはロータリーとは人間形成する精神的修養の場であり、単なる奉仕団体やボランティア団体でないと信じる、強い矜持が己にあるからだと思います。

◇島　正彦（館山RC）

櫻木ガバナーより理念研究委員会は事業プロジェクトと両輪のように、理念を確認しながら事業の実践を目指すために設置したとの再確認をした座談会でした。ロータリーを語るとき様々な考え方が存在することを再認識しました。ロータリーの理念としてService above self,One profits most who serves best、あるいはThe Four-way Testなどが我々に提示されています。更には職業奉仕と社会奉仕、国際奉仕などとの優先順位などが議論されます。私はこのような議論の中で自らの利益を優先する欲求と、他者の利益を優先することとの葛藤の中で、関係する他者のためを常に考え、実践するということをロータリアンとして最も大切にしたいと考えます。それは仏教の世界で言う「自利とは利他をいう」という事と同一であると思います。組織としてのロータリークラブを維持存続するために幅広い考えの方たちを迎えながら、ロータリーの説く「寛容」という行動規範の中で他者のために奉仕することを身に付けられた人物を１人でも多く育てるのがロータリーの矜持であり魅力となることを願います。そういう意味ではロータリーはまさに「ひとづくり」であるとも結論付けても良いのではないでしょうか。ロータリアンとして成熟することが職業でも成功し、商売も繁盛すると思われるようになったら良いですね。

ロータリー理念研究委員会
海寶勘一（千葉西）、平山勝巳（千葉若潮）、
大内　啓（柏南）、島　正彦（館山）、松田泰長（成田）